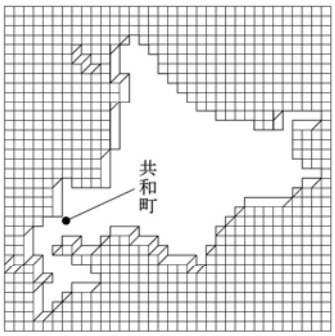
連載



あのマチ このムラ

地域おこし活躍中

No52

共和町の事例

―かかしのふるさとは高品質な農産物の生産地―

共和町の概要

「かかし」をまちのキャラクターとし、四季折々の美しい自然に恵まれた共和町は、国道五号線を利用し大消費地札幌から約九〇㎞の距離にある。後志支庁管内の北西部に位置し、かつてニシン漁で栄えた岩内町、秀峰羊蹄山を望む倶知安町等、五町一村に隣接している。

ニセコ・積丹・小樽海岸国定公園のエリアに含まれる神仙沼自然休養林は、海抜七五〇m以上の高原に位置し、ニセコ山系の湖沼の中で最も美しいといわれその神秘的な表情から神々や仙人が住むようだということから名づけられた「神仙沼」、日本一のフサスギナの群生地「大谷地湿原」がある。

温暖な気候と肥沃な大地に恵まれ、日本海に注ぐ堀株川が町の中央を東西に流れ、丘陵台地に農耕地が広がっている。古くからの米どころであり道外でも人気の高品質米、「らいでん」ブランドで知られるスイカ・メロン・スイートコーンなど高級果菜の産地である。「らいでん」の由来は、義経とメヌカの恋の伝説をもつ名勝「雷電」海岸をこの地から一望できることから名づけられた。

また、携帯電話やデジカメ、TV受信機のフィルター、PET樹脂用触媒など主に精密機器に用いられる、各種結晶材料や磁性材料を製造している「電子部品工場」があり、共和町の産業の一翼を担っている。

共和町の歴史は古く、北海道でも先進開発地域の一つに数えられている。

江戸末期の一八五七年（安政四年）、徳川幕府が幕府直轄の

夏の神仙沼

開墾場として町内の幌似・発足地区に御手作場を設けて米作を試したのが入植の始まりといわれている。

開拓はその後、幾度かの変遷をたどるが、一八八三年（明治十六年）旧金沢藩主「前田家」が士族授産のために結成した起業社によって本格的に開拓がすすめられ、以後本州各地からの集団移住が行われ各集落が形成されていった。町内にある「前田」という地名の由来は、この前田家からとったといわれている。

昭和三十年四月には、前田・発足・小沢の三村が合併、共和村が誕生し、昭和四十六年の町政施行により共和町となった。

共和町章は、共和の頭文字である「共」を上部に配し、「和」は円形をもって象徴した。「共」は三地区の住民が、共に力を合わせて新しい将来を築く姿をあらわし、下部の円形は、共和の沃野と住民の心の和によって大きく発展するかたちをあらわしたものである。

共和町の農業

共和町の基幹産業は農業であり、堀株川の周辺に広がる肥沃な平坦地で米・小麦・馬鈴しょ・スイートコーンが、高台地ではスイカ・メロンが作付けされている。

共和町には、三農協（前田・発足・小沢）あったが、平成十二年八月、岩内を加えた四農協が合併し「きょうわ農協」が誕生した。

農協の概要は、組合員数一、二六一人、正組合員戸数五〇九戸、販売取扱高五〇億七四百万円、購買取扱高二五億八六百万円となっている。

十九年度販売取扱高の上位五品目は、メロン二〇億六二百万円、米十二億九五百万円、スイカ八億三七百万円、馬鈴しょ三億八五百万円、スイートコーン二億七一百万円となっている。

第三次農業振興計画・中期経営計画（平成二十一年から二十五年度）を、今年度作成する予定になっている。

◇良食味米生産

昭和三一年の大冷害以降、土地改良・稲作技術の発展・向上により、米の生産は急増していった。

共和村でも、昭和三六年に出荷量一〇万俵を突破したが、収量とともに品質が問われる時代になってきていた。これに対応するため、同年、産米改良協会を設立し、共和米の品質向上への取り組みを開始した。「よい米」・「うまい米」を作るため、優良品種の普及並びに統一の指導など七つの事業を掲げ、積極的に産米改良に取り組んだ。昭和四六年にはその活動が高く評価され、優良産米共励会で最優秀賞を受賞している。

昭和四五年から米の生産調整が始まり、その後順次強化されたことにより、米の作付面積は、昭和四三年に二、七五〇ヘクタールあったものが、平成十九年には一、五五三ヘクタールとなり大幅に減少している。

共和町は、良質・良食味米の安定稲作地帯として位置付けられてきており、昭和六十年代には「キタヒカリ」や「ゆきひかり」、その後は「きらら３９７」、最近では「ほしのゆめ」や「ななつぼし」など良食味米の適正作付けを推進するとともに、基幹品種の定着化を図ってきている。

また、平成十四年には、共和町が事業主体となり最新の調製・検査・色彩選別システムを備えた米穀調製貯蔵施設が建設され、低温での貯蔵管理により一年を通して高品質で均一化された共和米が出荷される体制になっている。

◇畑作物の高品質化と安定生産

共和町の粗生産額の推移をみると、米の生産調整で稲作から畑作への転作が進んだ結果、昭和六十年頃を境に畑作が稲作を上回るようになっている。中でも大きく生産額を伸ばしたのが、スイカやメロンなどの果菜類で、特にメロンは価格的な優位性から昭和六一年頃から本格的な栽培が進んだ。

メロンは、発足地区で昭和初期から栽培されていたが、当時の社会・生活環境等から嗜好品としての価値が確立せず自然消滅していった。その後三十年位経過し、畑作振興の一環としてスイカ・メロンの栽培が十五戸の営農集団で再開された。「らいでん」スイカ・メロンの誕生である。昭和三九年には青果物生産出荷組合を設立し、らいでんスイカが初出荷された。

昭和六二年、当時としては最新式の設備を備えた西瓜選果施設が完成し、スイカの規格統一による品質向上に大きな役割を果たすことになった。

さらに、平成九年、全国で初めてレーザー光線を使った非破壊糖度測定装置を備えたメロン集出荷撰果施設が完成し、メロンの品質均一性がさらにレベルアップすることになった。この糖度測定装置は、平成十一年西瓜選果施設にも導入されている。

共和町の選果施設から出荷さ

メロン集出荷選果施設

「らいでん」スイカ・メロンなど

れるスイカやメロンは、自動検査システムで形状・空洞などが、糖度測定装置でうま味の決め手となる糖度が一個一個測定され、「らいでん」の銘柄にふさわしい品質のものとなっていることから、道内はもとより道外でも高い評価を得ている。メロンは七月上旬～十月下旬まで出荷しており、出荷量の約八割が道外移出となっている。

「らいでん」スイカ・メロンは、共和町を代表する畑作物であり、全道一の出荷量となっている。

スイートコーンは、露地（トンネル）栽培では道内どこよりも早く出荷され、札幌大通り公園のワゴン販売で使われているとうもろこしは、共和町産が出回ると全量これに切り替わる。また、真空予冷施設を利用し糖分の急激な低下を抑えることができることから、道外にも出荷

されている。

馬鈴しょは、早い融雪と温和な気候から、早出し産地として位置付けられており、関西・中京方面中心に出荷している。平成十八年には空洞選別機を導入し、より安心な品質管理・出荷体制となっている。

◇クリーン農業の推進

共和町のスイカは、昭和六十年頃連作障害による収量・品質の低下が問題となっていた。土壌病害菌（フザリウム菌）により、スイカなどに「つる割れ病」が多発し、対応に苦慮していたが、町内宮丘地区にある北海道原子力環境センター農業研究科が、ネギを混植するとつる割れ病がでなくなるという試験結果を発表し、多くの農家が実践に移し、ネギがウリ科の土壌病害を抑えるという効果を実証していった。現在ではスイカ・メロンの栽培農家のほとんどがネギの混植を取り入れている。

この取り組みなどにより、らいでんスイカ生産組合は、平成九年第二回環境保全型農業推進コンクールにおいて農林水産大臣賞を受賞している。

また、同組合は、長ネギ混植による土壌病害の軽減、土壌分析診断による化学肥料の軽減・適正施肥の励行、最低限の病害虫防除の実践など「美味しくて安全・安心」を最重点事項として取り組んでおり、北のクリーン農産物表示制度「YES！clean」に登録されている。

◇農薬飛散防止対策

農薬の散布については、飛散を防止するため、すべての作物で粉剤及びDL粉剤の機械による散布使用を全面禁止している。農薬散布対策ガイドラインを遵守した、地域一体となった取り組みを行っており、農協は粉剤及びDL粉剤の取り扱いを止めている。

水田の除草・殺虫・殺菌剤散布については、全組合員からの申込みを取りまとめ、地区ブロック毎に計画を立て、委託業者と日程調整を行い、無人ヘリコプターを使い水和剤の散布を行っている。十九年度は、延一、六二六ヘクタール実施している。

◇土作り振興対策

平成十九年は干ばつの影響により、基幹作物の一つである馬鈴しょが小玉傾向で収量減となった。地力の衰退や連作により、作物が最近の気候変化に適応できないことが収量・品質低下の一因とも考えられることから、農業の基本となる「土づくり」運動を二十～二二年度の三ケ年計画で実施する。

土づくりの内容は、一、地力向上対策として①緑肥作物の作付推進、②堆肥の投入、③堆肥施用機の導入、二、土壌改良対策として①ストーンクラッシャー施工、②心土破砕施工を実施した組合員に対し農協が助成金を支出するなどとなっている。

共和町の観光

共和町を散策するには、岩内町から共和町を経てニセコ町まで続く「ニセコパノラマライン」を通って神仙沼・大谷地湿原などを散歩し、田園の中に点在する郷土館・美術館などを鑑賞するルートがある。

また、農業を体験する場として「ふれあい農園」（七〇区画、

共和かかし祭り

一区画二〇坪）を開園しており、札幌市民も三〇名入園し、スイートコーン・馬鈴しょ・南瓜の植付け・収穫など農作業を楽しんでいる。

◇共和かかし祭

共和町の一大イベントとなっている「共和かかし祭」は、憩いの広場（役場庁舎裏）を会場とし、毎年八月に開催している参加型のお祭りである。

昭和五六年八月、町民相互の融和と連帯感を深めていくことを目的に、第一回「共和産業まつり」が開催され、第五回目からは「共和かかし祭」と名称変更している。町をあげてのお祭りで、町外から祭りに訪れる観光客も増加するなど、共和町の貴重な観光資源となっている。メーンイベントである「かかしコンクール」はじめ農産物の試食即売会・輓馬競技大会など会場内では多彩な催しが行われている。

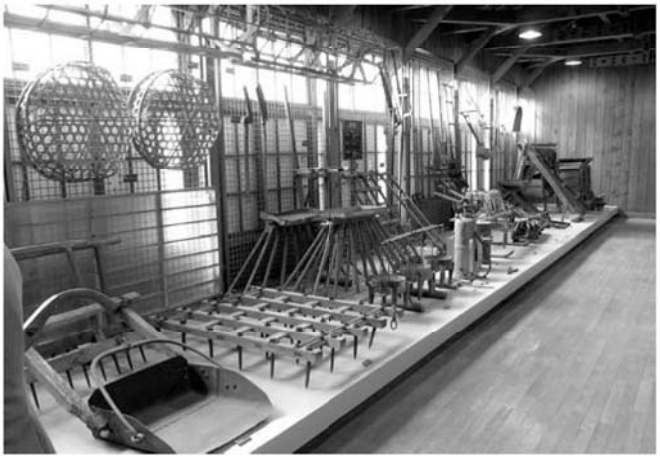
平成十九年の第二七回「共和かかし祭」は、八月十八日・十九日の二日間開催され、約三五、〇〇〇人の来場者でにぎわった。個性的な手作りかかしが勢揃いする「かかしコンクール」には小中学校、企業・職場グループ、老人クラブ、個人などから一〇六体の出品があり、お祭り会場内に展示された。

今年は、八月二三日・二四日の二日間開催する予定となっている。

◇かかし古里館

「かかし古里館」は、共和町の主産業である農業に関わった先人たちの開拓や生活文化の歴史を永く後世に伝える施設として、平成六年に開館した。

かかしコンクール



かかし古里館展示品

館内は一般展示室と収蔵展示室に分かれており、埋蔵品をはじめ、自然・産業・生活に関わる三、三三二点の資料が展示されている。開拓初期に使用されていた農機具や生活用品の展示や、稲穂が実るまでの過程を再現した実物展示など、創意工夫を凝らした展示は「先人の歩んできた道筋」を辿りながら、共和町の未来を指し示す道標の役割を果たしている。

収蔵展示室は、昭和五七年三月に廃校となった小学校を歴史的建造物として復元、昭和八年当時の校舎を再現している。木造校舎は、大人には懐かしい遠い思い出を甦らせ、子供には時代の変遷を感じさせるものとなっている。一般展示室には、「共和かかし祭」で入賞したかかしが展示されている。

近隣の小中学生、札幌などからの修学旅行生が歴史社会の学

習の場として訪れており、来館者は年間約五、〇〇〇人となっている。

なお、かかし古里館の向かい側には、「北のあじさい寺」として知られる明善寺があり、六月下旬から七月にかけて一、〇〇〇坪の境内は色とりどりの紫陽花が咲き、観光客を楽しませてくれる。

あじさい寺で花を観賞し、かかし古里館で先人たちの生活を知り、西村計雄記念美術館で個性的な作品を鑑賞する観光客が多い。

◇西村計雄記念美術館

共和町役場から歩いて一〇分程の小高い丘の上に見える近代的な美術館は、町出身の洋画家西村計雄氏が自作の絵画一〇三点を寄贈したことを機に建設され、平成十一年にオープンした。町の文化振興の拠点として位置付けられ、岩内町の「木田金次郎美術館」など後志管内に点在する美術館・文学館を結ぶ「しりべしミュージアムロード」に参画している。

美術館には、フランス政府やパリ市などからも作品が買い上げられ、「パリの日本人画家」として国際的に評価された西村計雄の油彩画約二、〇〇〇点、箱絵約三、〇〇〇点が所蔵されている。町民の募金によって購入・寄贈された作品「希望」も館内に展示してあり、共和町役場ロビーには、油彩原画「ふるさと」の陶板大壁画が掲示してある。

なお、北フランスノルマンディ地方で修行した西村氏のご子息が、町内にあるチーズ工場「クレイル」で四種類のナチュラルチーズを製造し、札幌市内の百貨店などで販売している。

後記

取材に訪れた日は、ちょうど田植えが始まった時期であった。

二日前は全道的に荒れた天気となり、共和町でも強風により畑のビニールが飛ばされた農家があったと聞く。二週間前には霜害にあった農家もあり、農業の生産現場に来ると農家の大変さが実感できる。

食の安全・安心が強く求められている中、共和町は、スイカ・メロンの集出荷撰果施設や米穀調製貯蔵施設を整備し、糖度や品質に高い基準を設け出荷の均一化を図るなど厳しい品質管理を行い、消費者に安心して買っていただける農産物を生産・販売してきた。

農協合併後八年経過しようとしているが、同一町内で生産され長年かけて築いてきた「らいでん」ブランドを維持・向上させるという共通認識により、合併当初のわだかまりも解消されてきたと聞く。

農家・農協が安定した経営基盤を築くためには、前記施設整備において果たした役場の支援体制が不可欠であり、三者間の意思疎通・協力関係が今まで以上に必要となる。

農畜産物の販売価格が低迷する中、原油価格高騰の影響を受け生産諸資材価格が上がり、農家経営の悪化が危惧される。

目の前の田植えを見ていて、優良品種を導入し栽培技術の向上を図り良食味米生産に取り組んできた農家の努力が報われ、次年度以降も生産意欲が持てる出来秋・販売価格になって欲しいと強く感じた。

㈳北海道地域農業研究所
特別研究員　上宗　辰美